

NP as we know it 表現類が示す諸特徴の移り変わり：

アメリカ英語を中心に¹

佐藤 嘉晃

京都大学ほか非常勤講師

smtosmtosmto@yahoo.co.jp

要旨：本研究は life as we know it に代表される NP as we know it 表現類と総称する一連の表現を考察対象とする。これら表現が現代英語において示す特徴の変遷について、史的アメリカ英語コーパス (COHA) を用いて調査を行った。調査には as 節主語、as 節動詞 know の時制、as 節と NP 間のコンマの有無、NP に生起する名詞の種類、関連する状況タイプなど多様な要因を考慮に入れている。これらの調査結果から得られたデータと観察内容を提示することで、今後の理論的考察や精緻化の基盤となる知見を提供している。

キーワード：as、know、接続詞、消滅、状況タイプ、史的变化

1. はじめに

本研究は現代英語に存在する例文 (1) のような直前の名詞句を修飾する as 節を含む文の諸特徴がどのように通時的に変化してきたのかということを、史的コーパスを用いて明らかにし、今後の理論的説明の土台となるデータを提供することを目的としている。

- (1) a. [...] they're convinced the world as we know it will collapse, and [...].
(COCA, NEWS)²

¹ 本稿は近代英語協会第 38 回大会 (2021 年 8 月 21 日、オンライン開催) にて「NP as we know it 構文の史的発達について」という題目で口頭発表した内容を発展させ、加筆・修正を施したものである。

² 下線は執筆者による。また、特別な事情がない限り、関連する部分のみを提示し、それ以外の省略した部分は角括弧で示す。これ以降、同様の形で例文を提示

- b. Life as we know it began in the ocean, so surely there are many more secrets yet to be revealed. (COCA, SPOK)

例文 (1) はそれぞれ現代アメリカ英語コーパス (COCA) から得た文であるが通常、節と節を結ぶ機能を持つ接続詞 *as* が主節全体ではなく、*as* 節直前の名詞句を修飾している。(1a) では *as* 節は *the world* を修飾しており、(1b) では *life* を修飾し、「私たちが知っているような世界は崩壊してしまうだろう」や「私たちが知っている生命というものは海で始まったのだ」というような意味をそれぞれ下線の引いた箇所は表している。また、(1) とは異なって、*as* 節主語が *we* 以外の主語であり時制が過去形である (2) のような表現も考察の対象に含める。

- (2) What mattered was that life as he knew it was over. (COCA, FIC)

これ以降これら表現全てを包括する用語として、現代アメリカ英語にて最も典型的かつ頻繁に生起する NP *as we know it* という語の連鎖を用いて、「NP *as we know it* 表現類」³と呼ぶことにする。

この NP *as we know it* 表現類の具体的な共時的特徴に関しては次節の先行研究を概観する際に述べるが、本論はこの共時的特徴と比較して、当該表現の①生起数②*as* 節主語③*as* 節動詞 *know*④被修飾名詞と *as* 節間のコンマ⑤*as we know it* という連鎖パターン⑥*as* 節によって修飾を受ける名詞句の種類⑦関連する状況タイプの計 7 点に焦点をあてて、これらの要素が時代とともにどのような分布的違いを表すのかを中心に調査し、その結果を提示する。

本論の構成は以下のとおりである。続く 2 節では NP *as we know it* 表現類の先行研究を概観しその諸特徴を提示する。3 節では史的アメリカ英語コーパスである COHA を用いて当該表現を調査しその結果を報告する。4 節はまとめと今後の展望である。

2. 先行研究

この節ではまず始めに名詞句を修飾する *as* 節の一般的特徴を述べている八木 (1996), Kumagai (1989, 1991), Huddleston and Pullum (2003) などの先行研究⁴を概

する。

³ NP は名詞句を指す。

⁴ この他、英語語法大辞典、続・英語語法大辞典、英語語法大辞典・第 3 集、英

観する。その後 NP *as we know it* 表現類に焦点を当てた Sato (2023) で行われた調査結果を提示し、当該表現の共時的特徴を示す。そしてこの節の最後に Allen (2006) や Oxford English Dictionary の情報に基づき、当該表現の通時的な初出例をその出現年とともに提示する。

2.1. 名詞句を修飾する *as* 節の一般的特徴

名詞句を修飾する *as* 節の特徴で最初に指摘しておくべき点は、*as* 節内に被修飾名詞と同一指示の表現が義務的に存在することである。(3) に示すような対応表現の有無によって、*know* の目的語に当たる要素に違いが生じ、その結果文全体の意味にも影響を与える。

- (3) a. Language as we know it is a unique human property.
b. Language, as we know, is a unique human property.

(八木 1996: 213)

(3a) の下線の箇所は「私たちが知っている言語というもの」といったような意味を表す。*it* は *language* に対応し、したがって *know* の目的語は *language* である。しかしながら (3b) のように対応する表現が存在しない場合、*language* を指すことは一般にはできない。この文が伝えようと意図するのは「私たちが知っている通り、言語というものは人間に特有の性質である」という内容であり、この場合の *know* の目的語だと考えられるものは主節の文全体 (i.e., *Language is a unique human property*) である。

さらに別の特徴として、被修飾名詞と *as* 節は一つの構成単位を成すことが可能である。これを示しているのが (4) の文である。

- (4) a. The novel as I have described it has never been established in America.
b. It is the novel as I have described it that has never established in America.

(八木 1996: 217)

一般に *it*-分裂文の焦点位置 (i.e., *it* と *that* の間) には構成素となるかたまりが生起できることが知られているが、(4a) の文の主語を強調する場合、(4b) のように *the novel* だけでなく、*the novel as I have described it* 全体が焦点位置に生起する。

語語法大辞典・第4集などに記載されている記述も参照のこと。

同様のことは (5) のように当該の as を含む能動文を、対応する受動文に書き換えた場合でも as 節が分離せず、修飾対象の English とまとまりを成すことから理解できる。

- (5) a. We can trace back the origin of English as we know it to the eighth century.
 b. The origin of English as we know it can be traced back to eighth century.

(八木 1996: 216)

上記のような名詞を修飾する形容詞的役割ではなく、主節の動詞句を修飾するような副詞的役割を持つ (6a) のような as は (6b) のように名詞修飾の形にすると不自然になるが、(6c) のように分離させて能動態の時と同じ位置のままにすれば通常の様態を表す副詞節となる。

- (6) a. I love Grace as she is.
 b. ?Grace as she is is loved by.
 c. Grace is loved by everybody as she is.

(八木 1996: 215-216)

また八木は (7a) の被修飾名詞と as 節の間に副詞の介在がある場合や、(7b) のようなコンマや括弧で括られたりする場合は挿入句としてみなし、(3) - (5) のような典型的な形容詞的役割を果たす名詞修飾の例とは（詳細は明らかではないが）意味が異なり、(6) のような副詞節の解釈しきれなくなるため、同じものとは見なしていないようである。

- (7) a. The novel exactly as I have described it
 b. Chomskyan linguistic theory, as I understand it,

(八木 1996: 218)

一方で Kumagai (1991) ではコンマの有無にかかわらず (e.g., (8))、この種の as 節を一貫して非制限用法の類であり、挿入句的な役割だと考え、先行する名詞と as 節は構成素を成していないと考えている。

- (8) a. Miss Joy, as the family calls her, had been visiting Washington.
 b. Edinburgh as Mendelssohn saw it was crystalised in his “Scottish” Symphony.

(Kumagai 1991: 97, 100, 一部改変)

確かに、コンマが主語と as 節の間に介在し、補足情報のように思える (8a) のような例を (4b) のような it-分裂文に書き換えるのは難しいであろう。しかしながら実際に分裂文や受動文に書き換えた時に as 節と先行名詞句がまとまりを持った形で生起できることを考慮すると、全ての例を挿入表現だと考えるのは適切ではないであろう (cf. Langacker 1987 の rule/list fallacy)。逆にコンマがあるからといって完全に名詞修飾の例ではないと考えることも同様に不適切であろう。Huddleston and Pullum (2003) では (9a) のような as 節の前にコンマのない表現はその先行する名詞句 (i.e., the church) と as 節は構造的に一体化しているが、(9b) のようにコンマのある表現の場合は、as 節は補足的な要素だとしているようであるが、どちらの例でも as 節は、先行する名詞句の特性やある側面を特定するものであると考えている点で二つの変種の間に意味的な共通点を見出している。

- (9) a. This is a photograph of the church as it was in 1900.
 b. Computer technology make the car, as we know it, a Smithsonian antique.
 (Huddleston and Pullum 2003: 1150, 一部改変)

特に史的变化を扱う本論に関係する側面としては、歴史的変化の中では二つの構造どちらでも解釈できるような曖昧な状況が頻繁に存在しており、それが統語的・意味的变化をもたらす要因となることがよくある (cf. Hopper and Traugott 2003, Traugott and Trousdale 2013)。したがって Huddleston らの捉え方や歴史的な変化を考慮して、本論ではコンマが存在しない場合だけでなくコンマが存在する場合の変種も NP as we know it 表現類の一部とみなして調査を行うものとする。

最後にこの種の as 節を含む統語構造とそれに関連する意味情報に関して述べる。Kumagai (1989) では先行名詞句を修飾する as は様態を表す副詞 (e.g., so, this way) を関係詞化したものだと考えている。例えば、(10a) のような文から (10b) のような名詞修飾を含むフレーズが派生されたと考えている。

- (10) a. The Japanese see it [MANNER ADV. the same way]
 b. the problem as_i the Japanese see it [t_i]

(Kumagai 1989: 60)

直前の名詞を指す関係代名詞 *which* とは違って、直前の名詞句と同一指示ではない *as* がなぜ当該の名詞を修飾できるのか、そしてどのようにして *the problem* (やその他要素) が派生を遂げることによって、*as* の前に生起すると同時に *as* 節動詞の目的語に代名詞としても生起することが可能であるのかということの詳細は不明なままではあるが、この種の *as* を様態副詞であると考えているのは彼だけではない。Huddleston and Pullum (2003) も同様の捉え方をしており、(9) の例文それぞれの焦点は *how the church was in 1900*、*how we know the car* であるとし、*as* の意味を *how* と対応させている⁵。

2.2. NP as we know it 表現類の共時的な分布特徴

この節では Sato (2023) で調査された NP *as we know it* 表現類の共時的特徴を提示する。Sato (2023) では現代アメリカ英語コーパス (COCA) を使用して、NP *as we know it* 表現類がどのような分布をなし、どういった特徴を持つのかを明らかにしている。

まず始めに NP *as we know it* 表現類についてのトークン・タイプ頻度、*as* 節主語の種類、NP に占める名詞の種類がまとめられている表 1 を以下に提示する。

⁵ 小川 (1985) でも似たような考え方でこの *as* を捉えており副詞 *so* と関連させている。

表 1 NP as we know it 表現類の頻度と主要部名詞の種類 (Sato 2023: 75)

group α (e.g., <i>NP as we know it</i>)		group β (e.g., <i>NP as he knows it</i>)
token frequency	1350 tokens	230 tokens
type frequency	435 types	86 types
varieties of modified nouns		
life (203), welfare (126), world (125), civilization (65), medicare (29), system (22), fact (18), industry (14), television (14), democracy (13), universe (13), internet (11), society (11), America (10), culture (9), stress (9), war (9), baseball (8), history (8), reality (8), security (8), education (7), science (7), capitalism (6), earth (6), government (6), IRS (6), party (6), process (6), story (6), time (6), church (5), country (5), landscape (5), law (5), music (5), politics (5), privacy (5), skiing (5)		life (90), world (28), truth (6), civilization (5), fact (5), television (5), family (4), universe (3), welfare (3), country (2), detail (2), discipline (2), marriage (2), medicare (2) (adolescence, America, bar, baseball, bird, Bulls, business, character, child, Christianity, circumstance, classroom, college, competence, culture, darkness, discourse, Espinoza, event, evidence, exhibition, face, field, future, history, hunting, internet, James, journalism, lifestyle, Macready, market, moderation, Momo, mountain)

この表では as 節主語が we であるグループとそれ以外 (e.g., I, he, she, Adams) のグループで分類されている。最初にまず注目に値する点は as 節主語のトークン頻度の圧倒的な差である。we 単体の数がそれ以外の主語を合算させた数の約 6 倍ほどあることから、NP as we know it 表現類が使われた際、as 節主語に we を用いるのが典型的であることが分かる。そしてこの as 節主語が we の場合、動詞 know の 95%以上が現在形で使われていることが明らかとなっている。結果として、as 節主語 we、動詞 know の現在形、代名詞 it を含んだ NP as we know it という連鎖パターンで生じる例が約 1200 例も存在し、全体の 75%以上の割合を占めている⁶ことから、この連鎖パターンがこの種の表現で非常に確立した地位を築き上げていることが理解できる。別の言い方をすれば、この NP as we know it というフレーズは英語話者の中で一つのチャックとして記憶されている可能性が高いことがこの数値から示唆される。この表自体には載っていないが、コンマの有無に関しても、存在する割合が 10%未満であり圧倒的にコンマが無い形で使われていることが判明している。これらの結果を考慮すると、NP as we know it 表現類の多くは as 節と先行名詞句が一つのかたまりとして一般に認識され使用されることが典型的であることが窺える。これが明示的に示されている例が (11) である。この例では引用符が life だけでなくそれに続く as I know it まで含んだものであることに加え、この引用符で囲まれたフレーズがショーの名前であることも同時に示さ

⁶ as 節主語が we のグループ内では約 90%の割合にもなる。

れていることから、明らかに life as I know it で一つの構成素を成していることが理解できる。

(11) Bret's most recent show, "Life As I Know It" ended with a proposal.

(COCA, SPOK/Sato 2023: 82)

NP as we know it 表現類の NP に生起する名詞の種類に関していえば、それぞれのグループのタイプ頻度がトークン頻度の約 1/3 の割合ほど存在していることから、当該の表現類が特定の名詞のみしか共起しないものではなく幅広い種類の名詞と共起可能である (i.e., 生産性が高い) ことが分かる。しかしながらタイプ毎の生起割合が一定になっているわけではなく、特定の種類の名詞が特に高頻度で共起することもこの表から明らかとなっている⁷。どちらのグループにおいても下線が引かれている、life, world, welfare, civilization などの語は頻繁に生起する種類の名詞であり、これらの名詞はどれも私たち人類が（文化的な）生活を営む上で欠かすことのできない基盤や要素を表すものであるという共通点が存在している。またこの表に提示してある名詞の種類を見ると、上記以外の名詞も日常生活に密着・根差したものを表しているものが多く含まれているが、形を具体的に持ったものではなく特に形而上的な抽象概念であることが多いことも留意すべき点であろう。

さて、次に NP as we know it 表現類に関連する状況タイプについて述べていく。Sato (2023) では計 8 つの状況タイプに分類しているが、それらを取りまとめたものが表 2 である。また特に際立つ上位 3 つの状況タイプである非存在タイプ (non-existence)、起源タイプ (origination)、変容タイプ (transformation) の例を (12) にそれぞれ示す。

⁷ 括弧内の数字がその名詞が生起した合計数である。

表 2 状況タイプの種類とその生起頻度 (Sato 2023: 83)

situational type	group α (e.g., NP as we know it)	group β (e.g., NP as he knows it)
non-existence	692 (50%)	101 (43%)
origination	158 (11%)	3 (1%)
transformation	133 (10%)	27 (12%)
correspondence	51 (4%)	13 (6%)
non-concurrence	53 (4%)	17 (7%)
existence	50 (4%)	3 (1%)
other situations	104 (7%)	40 (17%)
non-situational (e.g., place, title)	140 (10%)	30 (13%)
total number ⁴	1381 (100%)	234 (100%)

- (12) a. The world as we know it will cease to exist. (COCA, FIC)
 b. Henry Steinway invented the piano as we know it. (COCA, MAG)
 c. Television as you know it is about to change. (COCA, SPOK)
 (Sato 2023:71, 77, 78)

ここでは紙幅の関係上、個々のカテゴリー全ての定義を挙げることはしないが先ほど言及した3つのカテゴリーを紹介する。まず非存在タイプであるが、これは「ある実体が消滅、危機的状態またはそれに類する状況に陥いる場合や、ある場所や時においてその実体が存在していない」(Sato 2023: 76) ことを表していると解される状況のことである。この非存在タイプの典型例が「私たちが知っているような世界が今後なくなってしまう」という意味を表す (12a) である。次に起源タイプであるが、これは「ある実体が誕生したり、形成されたりする」(Sato 2023: 77) 起源やそれに類する場面として解される状況のことを指す。この典型例が「ヘンリー・スタインウェイが私たちの知っているようなピアノを発明した」という意味を表す (12b) である。最後に変容タイプとは、どのようなタイプの変化なのか (e.g., 消滅、誕生) が具体的に記されていないが、「ある実体やその何らかの側面が変化する」(Sato 2023: 78) と解される状況のことを指す。「あなたの知っているようなテレビはまさに今変わろうとしている」という意味を表す (12c) のような例がこのタイプの典型例として含まれる。

驚くべきことは、これら3つの状況タイプで全体の約7割を占めているということである。特に際立っているのは非存在タイプであり、このタイプは全体の約過半数ものの割合を占めている。ここから NP as we know it 表現類は単に変化する状況と結びつくというだけでなく、当該の実体が存在しなくなるまたは存在し

ていないという状況と特に顕著に結びつく性質があることが明らかとなった⁸。

2.3. NP as we know it 表現類の初出例とその時期

NP as we know it 表現類の史的調査に関する詳細な研究は管見の限り見当たらない。僅かな情報ではあるが言及しているものが、Allen (2006) と Oxford English Dictionary (OED) のオンライン版である。したがってこの節においては上記二つの情報源に基づいて話を進めていく。まず Allen (2006) では以下に示すような形で NP as we know it 表現類の中の最も典型的な例である (NP) as we know it というパターンについてこのフレーズが表す意味を初出例とともに提示している。

(13) - as we know it

such-and-such in the form that is familiar today.

‘The captivity was the starting-point of Jewish national faith, as we know it.’

(1873, *The Wetherel Affair* / Allen 2006: 422)

(13) の当該フレーズの意味が書かれている中で familiar という情報は we が人々一般をさす場合の意味から導き出されるものであろう。また today は know が現在形であることから含意されているものであると考えられる。この説明の中で形態を意味する form という情報が特にこのフレーズ全体から導かれる独特な意味要素であると考えられる。そして、このフレーズは Allen によると 19 世紀頃から書きものの中で現れるようになってきたのだといい、1873 年の例を提示している。さらに彼は the end of civilization as we know it というフレーズが 1941 年の *Citizen Kane* という映画の中で登場して以来徐々に使用頻度が増えてきたのだと述べている。しかしながら情報としてはここまでである。

OED のオンライン版では (14) で示すように定義自体は Allen のものとほとんど同じではあるが、注目すべきは初出年であり、Allen が発見したものよりも 35 年早く見つかっている。

(14) -as we know it

As is familiar or understood at the present time

‘The past, as we know it, is made by man.’

⁸ 類似した NP that we know のようなフレーズと比較しても、NP as we know it 表現類はこれら 3 タイプと有意な結びつきがあることが明らかになっている。

(North American Review January 54/OED [s.v. ‘as we know it’ in *know* (v.)], 1838)

OED に関しても情報はここまでで、詳細に関しては明らかではない。これら 2 つの情報源から、ともにアメリカ英語であること、少なくとも 19 世紀中頃から徐々に出現しその頻度が徐々に増加していったであろうことが予測される。したがって本研究において以下の節では 19 世紀からのアメリカ英語のデータを中心として扱い、NP as we know it 表現類がどのようにその特徴を変化させていったのかを調査していく⁹。

3. コーパス調査

この節では史的コーパスを活用して、NP as we know it 表現類が通時的にどのようにして 2 節で提示した共時的諸特徴を持つように至ったのかということを探求し、その結果を提示する。

3.1. 調査目的と方法

本稿の調査目的は、2 節で概観した NP as we know it 表現類の共時的特徴を構成する諸要素の個々の通時変化を数値化しその傾向を観察することにある。具体的には、生起数、as 節主語、動詞 know の時制、NP の種類、コンマの有無、as we know it という連鎖パターン、関連する状況タイプ、これらそれぞれが時代毎にどのような分布と推移を表すのかに焦点をあてて調査を行う。2.3 節で確認したように、NP as we know it というフレーズはアメリカ英語において 19 世紀中頃から使用され始めたという先行文献の記述に鑑みて、本調査ではアメリカ英語の歴史コーパスである、Corpus of Historical American English (COHA) を用いて調査を行う。COHA はオンライン上で利用できる歴史コーパスの中でも非常に大規模で、2021 年に行われたアップデートによって、1820 年代から 2010 年代までのアメリカ英語の文章を 4.75 億語収録した均衡コーパスである。さらに 10 年毎に検索することができ、細かに言葉の移り変わりを捉えることが可能であることに加え、規模や包括する時代範囲は本稿の対象とする NP as we know it 表現類の調査に適したものである。

調査方法に関してはできるだけ多くの例を収集するために、「as * KNOW

⁹ NP as we know it 表現類がなぜ今の形式になったのかというその経路や誕生に至った起源そのものを辿っていくことに関しては稿を改めたい。

it/them/him/her/you/me/us」という検索式を用いた¹⁰。アスタリスクは任意の一語、大文字の know は know, knew, knows などの活用形を包括した記号である。この検索式から分かるように、当該の NP as we know it 表現類ではない用例が出力として多く得られるが、それらは全て手作業で排除している。具体的に排除した例をいくつか (15) に提示する。

- (15) a. [...] we shall give the history of the transaction, as we know it happened.
(COHA, MAG, 1827)
- b. [...] we shall speak of the various newspapers, only as xve [sic. we] know them from personal observation, [...]. (COHA, MAG, 1835)
- c. [...] the bloody lasso came, as I knew it would, [...]. (COHA, FIC, 1848)
- d. [...] preliminary snaps; to which the horses pay no heed, as they know it is only for the driver's amusement. (COHA, NF/ACAD, 1872)
- e. [...] he would not deny his assertion, false as he knew it to be.
(COHA, FIC, 1839)
- f. Such as we descrihe [sic. describe] him, and as we knew him, this gentleman had thrown off the manners of civilized life, [...].
(COHA, MAG, 1835)
- g. [...] those [...] who do it as far as they know it! (COHA, NF/ACAD, 1868)

(15a) は know の目的語が代名詞ではなく節を取っていることや as 節は主節の動詞が表す行為の様態を表す可能性が非常に高いため除外している。同様に、as 節が文末に生起する (15b) では、just や only のような様態の度合いを強める副詞表現の存在も相まって、as 節は直前の名詞句を修飾するのではなく、主節動詞が表す行為の様態を描写すると考えられるため除外している¹¹。(15c-e) は as 節の直

¹⁰ 初回のデータ収集は 2020 年の 6 月であるが、COHA の更新に伴い、2023 年 8 月に再度データを取得した。

¹¹ as 節が後置されている例を全て除外すると (i) のような典型的な NP as we know it 表現類だと考えられる例も大幅に除外することになり、結果に大きな影響を与えるため、上記の副詞が介在する場合のみ除外しているが、4 例とごく少数である。確かに副詞が介在しない (ii) のような例はその当時では動詞修飾が好まれた可能性はもちろんある。また現代の英語母語話者でも人によってはこのような例は動詞修飾の解釈を好む場合がある。しかしながら、そのような状況がある

前に know の目的語に対応する名詞が存在しないことに加え、意味的にも主節と同じ内容を補足的に述べていたり (15c)、主節に対する時や理由を表していたり (15d)、譲歩を表したりする (15e) ために除外している。また本調査は NP as we know it 表現類の別表現からの発達経路や起源を扱うものではなく、現在の形式における当該表現 (e.g., (12) - (14)) が持つ諸特徴の通時的変化を扱うものであり、その目的の中に as 節の前に生起する普通名詞の種類分布やコンマの有無の変化を明らかにすることが含まれているため、普通名詞でなく、コンマの有無にも影響を与える such のような as と関連する語が生起している (15f) のような例は除外する。同様の理由そして 2.1 節で概観した NP as we know it 表現類の構造を考慮して、同等比較の構造を持つ as far as を伴った (15g) のような例¹²も除外している¹³。こうしたノイズを取り除いた結果、1820 年代～2010 年代までの範囲で合計 874 件の該当例を抽出した。次節ではこれらの例を分類し、そこから得られた特徴について観察していく。

としても、名詞修飾だと認識する母語話者や、同じような主節内容にもかかわらず明らかに NP as we know it 表現類である (iii) のような例が存在するため、潜在的に二つの解釈で曖昧であると考え総数の中に加えている。

- (i) Here we have the beginnings of the office of the professionalhazzan (sic. professional hazzan) as we know it today. (COHA, NF/ACAD, 1970)
- (ii) [...] he [...] told the truth as he knew it, [...]. (COHA, NEWS, 1890)
- (iii) Sire, the truth as I know it, I will tell you. (COHA, FIC, 1901)

調査結果を観察する中でこのような曖昧性は特に主節が発話・認識動詞 (e.g., tell, speak, know) や作成・描写動詞 (e.g., describe, write) が関わる際に顕著になることが判明したが、これらの動詞類だけを除外することに対する恣意性を考慮して調査対象に含めている (がどちらの場合にせよ NP as we know it 表現類の特徴が著しく損なわれるわけではない)。後に提示する被修飾名詞の種類の中に fact や truth などが一定の範囲で出現するのは、こうした例が原因である。

¹² as far を含む例は含まない例と比べ被修飾名詞の実体が関与する状況のタイプにも違いが表れていることがデータ分類の際に明らかとなっている。さらに、it as we know it のような塊は NP as we know it 表現類にはみられず、現代英語において容認されないことにも注意されたい。

¹³ もちろん (15f, g) のような例が現在の NP as we know it 表現類の形成に影響を与えた可能性はあるが、本稿の目的の範囲外であるために扱わない。この種の起源を扱う場合は COHA だけでは不十分であるため、中英語後期や初期近代英語などを含むコーパスが必要であろう。

3.2. 調査結果と観察

この節では前節で示した調査手順によって COHA から得られた計 874 件の NP as we know it 表現類の調査結果を提示し観察を行っていく。これら全ての例は当該表現に関連する要素に従って分類し、時代毎の分布と推移を示した表や図を作成し以下に提示する。まず始めに、NP as we know it 表現類の as 節主語の種類、as 節動詞 know の時制、as 節とそれに先行する名詞の間のコンマの有無、現代英語において最も典型的な連鎖である as we know it の生起数、被修飾名詞句の名詞のタイプ、NP as we know it 表現類のトークン数、そしてそのトークン数を 100 万語あたりに換算した数値、これら 7 つの要素に従って分類した結果を 30 年刻みで表示したものが表 3 である。同様に、状況タイプの推移に関しては表 4 に提示する。この表 3 と 4 の数値を基にして、次節以降では各要素の特徴について具体的に記述していく。

表 3 NP as we know it 表現類の要素毎の生起数の推移

	1820-40s	1850-70s	1880-1900s	1910-30s	1940-60s	1970-90s	2000-10s
as 節主語 (we:その他)	6:1	8:12	58:41	94:65	121:45	158:47	156:62
know の時制 (現在:過去)	5:2	12:8	74:25	111:48	132:34	172:33	176:42
コンマ (有:無)	7:0	14:6	33:66	50:109	30:136	26:179	21:197
as we know it の連鎖	1	4	36	65	92	136	135
タイプ頻度	5	17	67	114	115	112	100
トークン頻度	7	20	99	159	166	205	218
100 万語あたり	0.19	0.38	1.58	2.08	1.95	2.23	3.10

表 4 NP as we know it 表現類に関わる状況タイプの生起数の推移¹⁴

	1820-40s	1850-70s	1880-1900s	1910-30s	1940-60s	1970-90s	2000-10s
非存在	0	0	10	18	38	97	101
起源	1	1	9	18	24	18	16
変容	0	1	3	13	6	17	23
不一致	0	2	6	13	14	17	16
その他	6	16	77	108	89	65	64
合計	7	20	105	170	171	214	220

¹⁴ 状況タイプの合計が表 3 のトークン頻度の合計より多い年代があるのは、状況が並列的に複数描写されている場合、それぞれ別々にカウントしているからである。

3.2.1. 生起数の変化と付随的特徴

まず始めに大局的な視点から NP as we know it 表現類のトークン数を 100 万語あたりの生起数に調整した際の時代毎の推移と時代毎にみられた特徴について概観する。その後、表 3 と表 4 に示されているそれ以外の要素の推移を順に見ていくことにする。それぞれの事例においては、変化を視覚的かつより具体的に理解できるように図を用いて説明する。COHA では最小 10 年単位で区切って検索することができるが、推移を 10 年毎に分類した結果では生起数や偶発的影響によって変化の波が大きく、一般的な傾向や特徴を適切に捉えることが困難である¹⁵ ために、30 年毎に分割している。100 万語あたりの生起数の分布の推移を表したものが下の図 1 である。

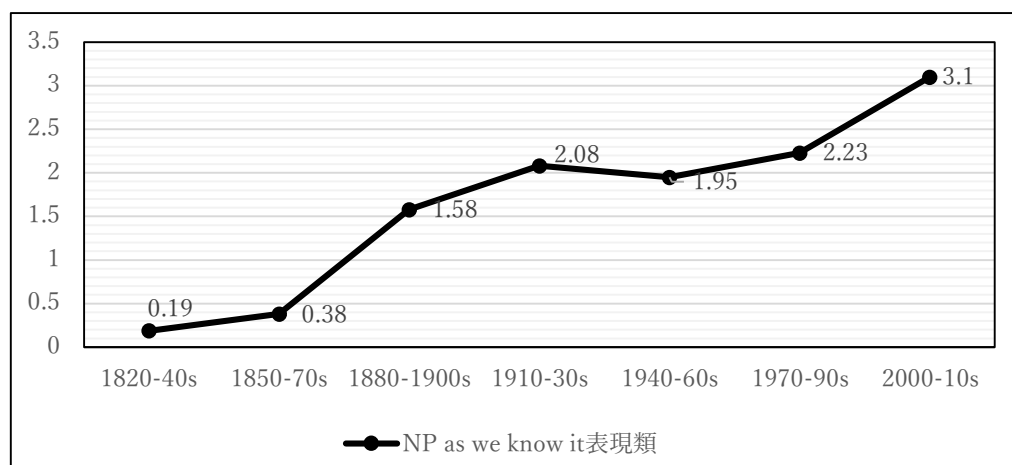


図 1 NP as we know it 表現類の生起数の推移
(100 万語あたり、30 年毎)

このような 30 年周期に分けた場合、右肩上がりに NP as we know it 表現類の使用が増加していることが見て取れる。COHA で得られた中で最も古い例は前節の (14) で提示した例であり、この点 OED の記述と一致している。

より詳しく見ると、19 世紀初期や中期においてはほとんどその使用がみられなかったが、19 世紀末や特に 20 世紀に入ると格段にその生起数が増大していることが分かる。1850-70 年代と 1880-1900 年代での生起数を比較すると 4 倍以上に

¹⁵ 特に当該表現の出現頻度の低さによって、対象年代の初期においては極端な形で個々の要素の割合が算出されてしまう。

値が増えていることは特筆すべき点である。したがって 19-20 世紀の転換期に大きく使用が拡大され、言語コミュニティの中で一定の知名度・慣習性を得て、ある程度人々の中で定着し始めたであろうことが推測できる。実際にこの年代ではいくつかの興味深い例が現れ始める。例えば、文とは独立して単独で使用される (16) のような例が 1889 年には見つかる。これは小説の題名である。

(16) LITERARY BOSTON AS I KNEW IT

(COHA, FIC, 1889)

著者の William Dean Howells が小説の題名に使おうと意識に上る程度には認知されている表現であることが分かると同時に、この小説の読者一般に広くこの表現の存在を行き渡らせる効果もあったものだと考えられる。さらに 20 世紀初頭には目的語の一部としてまるごと倒置されている (17) のような例も観察されるようになる。

(17) Sire, the truth as I know it, I will tell you.

(COHA, FIC, 1901)

(16) と (17) の例においては、明らかに as 節は主節述部を修飾する付加詞なのではなく、先行名詞句を修飾する機能を果たしていることが理解できる。

20 世紀初期から中期にかけては数値上大きく目立った変化はないものの、この時期になると引用符などを用いて NP as we know it 表現類の、そのかたまりとしての存在を明示的に示す例が出現し始める¹⁶。

(18) [...] the atmosphere of Mars is less than 1% as rich in oxygen as Earth's air-insufficient to sustain "life as we know it."

(COHA, MAG, 1935)

また 20 世紀後半から 21 世紀の始まりの間にも 100 万語あたりの生起数が 1.95 から 3.12 へと 1.6 倍ほど使用数が顕著に増加していることが分かる。これは後ほど述べる状況タイプの推移 (cf. 3.2.7 節) と関連があるように思われる。この時期、特に 1990 年代以降に特徴的なのは (19) のように引用符が当該表現の部分だけでなく状況を表す語 (i.e. end) まで含んだ形で使用されている例が複数存在し

¹⁶ 名詞のみに引用符が置かれていると考えられる (i) のような例はこれよりも早く 1910 年代にはみられる。

(i) AW [sic. "LAW] and order" as they know it in Paterson was well represented at the trial of Eliza-beth Gurley Flynn. (COHA, MAG, 1915)

始めるとのことである。

(19) By promising to “end welfare as we know it.” (COHA, MAG, 1994)

この点特筆すべきは引用符に含まれる状況は非存在タイプに限られているということである。

以上述べてきたように、NP as we know it 表現類は時代とともに着実に増加傾向にあり、この傾向は現代まで続いていることが明らかとなった。そして特定の年代から NP as we know it 表現類の単独使用や当該表現を丸ごと含んだ倒置、そして引用符が関係する特徴的な例が出現し始めることも判明した。

3.2.2. as 節主語の種類

次に NP as we know it 表現類における as 節主語がどのように変化しているのかを観察する。現代英語においては代名詞 we の割合が支配的であることは 2.2 節で述べたとおりである。したがって、as 節主語の種類を we かそれ以外で分類し、どのような推移がみられるのかを見ていく。その結果を図式化したものが図 2 である。

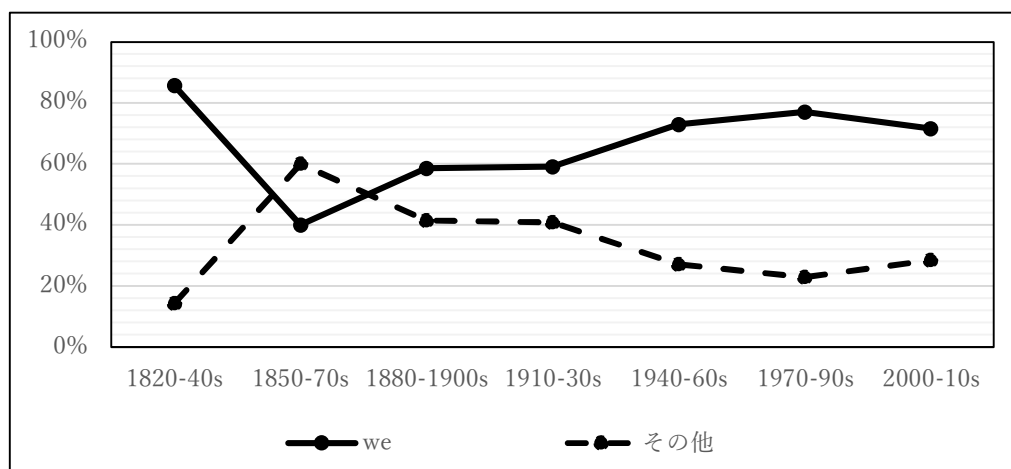


図 2 as 節主語の推移

この図から 19 世紀中頃から徐々に as 節主語 we が優勢になり、それに伴って he や they などのその他の主語の割合が減少しているのが見て取れる。特に 1880 年代から 1930 年代においては表 3 のトークン頻度から分かるように安定して一定

数生起数が観察されているにもかかわらず、代名詞 *we* とそれ以外の使用率にそれほど大きな違いが見られない。この点、現代の NP *as we know it* 表現類の *as* 節主語の特徴とは異なる様相を示しているといえるだろう。

さらにこの結果を支持・補強する目的として、動詞 *know* の主語が当該表現以外でもどのような分布で一般的に使われていたのかを調査した。調査結果から得られたデータを以下に図示する。

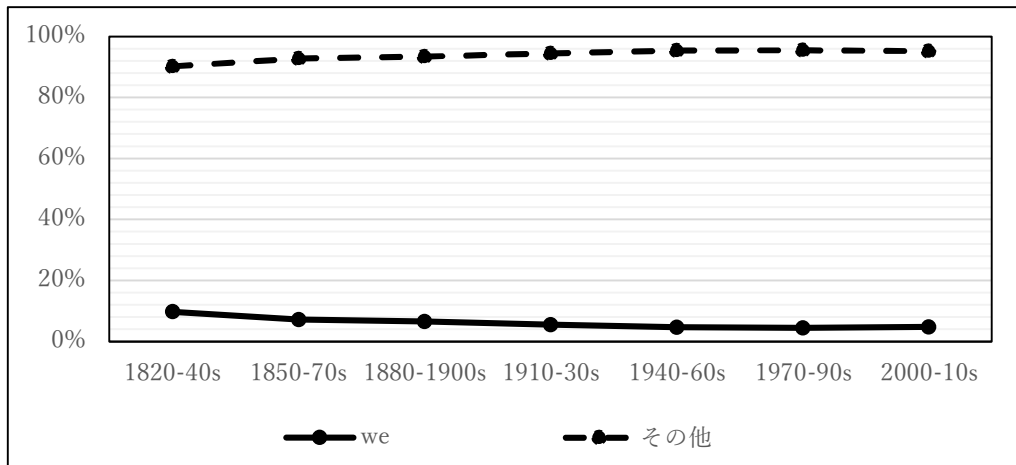


図3 動詞 *know* 一般の代名詞主語の推移

この調査では便宜的に *know* 全体の主語を代名詞のみに限定しているが、それでも明らかに代名詞主語 *we* の割合が圧倒的に低いことが図3を見れば一目瞭然である。どの年代においても代名詞 *we* の割合が10%を超えることはなく、一般的に動詞 *know* は *we* 以外の主語を好む傾向にあるようである。したがって、これらの結果から NP *as we know it* 表現類は *know* 一般の主語の分布とは大きく異なる独自の振る舞いを見せ、時代の経過とともに徐々に代名詞 *we* が *as* 節主語の典型的な地位を占めるようになったのだということが分かる。

3.2.3. *as* 節動詞 *know* の時制

現代英語における NP *as we know it* 表現類の *know* の時制は *as* 節主語が特に *we* の場合、95%が現在形とほとんど過去形が使われていないことが COCA での調査で明らかとなっている (cf. 2.2 節)。この節ではその範囲を広げて *as* 節動詞 *know* 一般の時制の変化に大きな違いがみられるのかを確認していく。調査結果から得られた数値を基に図式化したものを以下に示す。

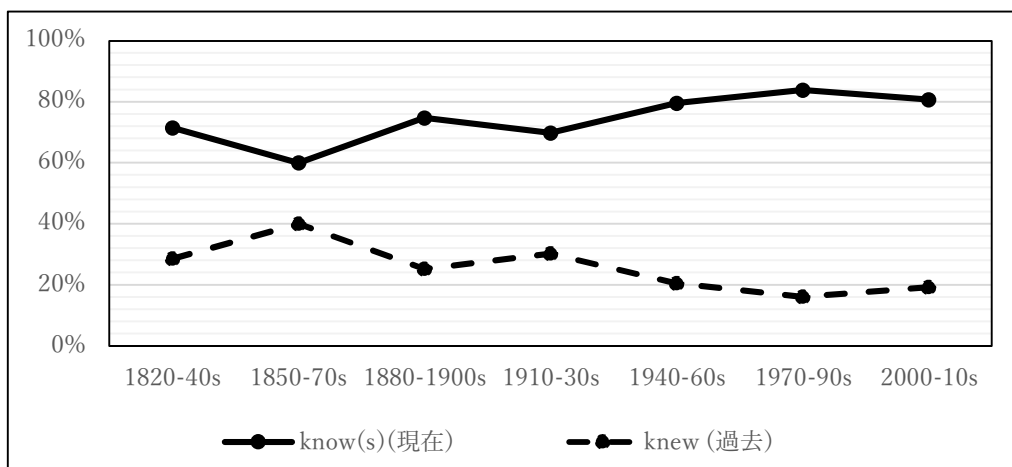


図4 as 節に生起した場合の動詞 know の時制の推移

図4から、19世紀半ばから徐々にas節に生起した場合の動詞 know は現在形で使われる傾向 (i.e., 60-80%の範囲) にあり、逆に過去形は減少傾向 (i.e., 40-20%の範囲) にあることが分かる。しかしながら、今まで見てきたような大きな変化はみられないようである。前節と同様に動詞 know 一般の時制分布はどのような推移を示すのかを調査した。その結果を図5に記す。

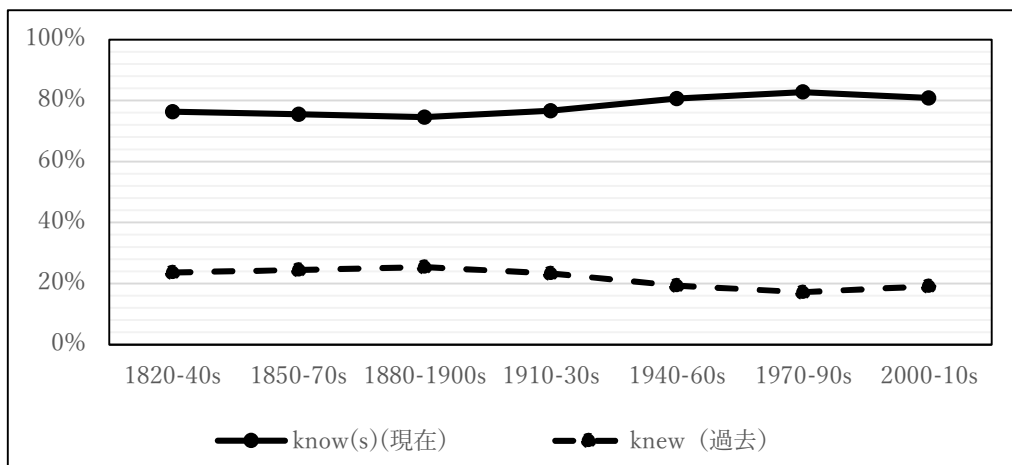


図5 動詞 know 一般の時制の推移

調査範囲の約200年間に於いて、現在形の割合が一貫して8割前後でとどまっていることから大きな変化は確認されず、動詞 know は一般的にどの時代区分にお

いても現在時制で使われることが典型的であることが図 5 から読み取れる。ただし、図 4 においても 1850-70 年代を除けば、どの区分でも 7 割から 8 割程度が現在形であることに鑑みると、両者に際立った違いはなく、NP as we know it 表現類においても同程度に動詞 know は現在形で使用することが好まれるとみなすことが可能であろう。したがってこの点に関しては現時点では動詞 know の一般的な傾向が反映されていると考える。

3.2.4. コンマの有無

この節では NP as we know it 表現類における NP と as 節の間に存在するコンマ¹⁷の割合が時代を通じてどのように変化していったのかという点を明らかにしていく。COCA からのデータでは、現代英語においてはコンマが存在する NP as we know it 表現類は非常に少なく、10%未満であることは 2.2 節で言及した。今回の通時的調査から得られたデータを基に図式化すると図 6 のような結果が得られた。

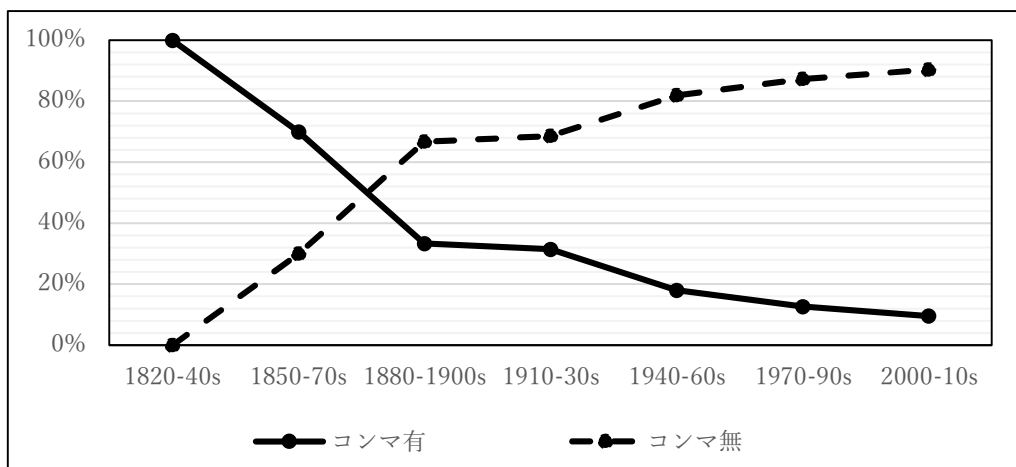


図 6 as 節と先行名詞の間に存在するコンマの割合の推移

この図からコンマ有の割合が 20 世紀初頭までには急落し、コンマ無の割合が急増していることが分かる。その後も着実にコンマ無の割合は上昇していき最終的には COCA からのデータと同様にコンマ無の割合が 9 割を超える結果となった。興味深いのは、3.2.1 節でも軽く触れたが、コンマ無しの割合がコンマ有の割合を

¹⁷ 便宜上、コンマという表現を用いるが m ダッシュで区切られている場合や括弧で as 節のみ括られている場合もコンマ有として含んでいる。

上回った 1880-1900 年代において (20) のような明らかに NP as we know it で一つのかたまりを構成している例が出現し始めたことである。(20a) は小説のタイトルであるから、この例は NP as we know it 表現類が単独で生起しているものである。(20b) は本来ならば tell you の後に生起して as 節は主節が表す動作様態を描写する機能と当該の名詞修飾の機能の間で曖昧性が生じていたであろうが、この例ではその曖昧性が解消されている。

- (20) a. LITERARY BOSTON AS I KNEW IT (= (16))
 b. Sire, the truth as I know it, I will tell you. (= (17))

さらに次の 1910-30 年代においては (21) のように NP as we know it 表現類全体を引用符で囲う例が確認され始める。

- (21) a. [...] in his account of “Woodrow Wilson as I Know Him,” [...].
 (COHA, NEWS, 1921)
 b. [...] the atmosphere of Mars is less than 1% as rich in oxygen as Earth’s air-insufficient to sustain “life as we know it.” (= (18))

(21a) は伝記のタイトルであるのでそれを明示するために文中で引用符が使われており、(21b) では火星において単に生命体がいるかどうかではなくて「私たち地球人がよく知っている、地球に存在している種類の」生命体を意図するために当該表現が使われその意味を反映する形で引用符が使われていると考えられる。どちらの例も引用符によって明らかに as 節は先行名詞句と一つの単位を構成していることが理解できる。

こうした単独生起や引用符の出現はコンマ有の例が減少しコンマ無の割合が増加する傾向と相関またはそれを象徴している可能性が高い。一般にコンマが存在する場合、それによって区切られた節やフレーズは主節と統語的に独立し、別々の単位をなすと考えられている (cf. Brinton 2008, González-Álvarez 1996, Huddleston and Pullum 2002, Quirk et al. 1995, Rouchota 1998)。逆にコンマに相当するものがない場合、関係詞の制限用法のように主節の一部として機能することが典型的である (Quirk et al. 1995: 1258)。コンマの有無がそれぞれの特徴を必ず正確に反映するものではないが、少なくともそうした傾向が典型的にあると示唆するものであるということは間違いではないだろう。したがってこのことを考慮すると、補足的な形で導入されることが多かった as 節が主節の一部として組み込

まれ、NP as we know it 表現類が一つの単位として機能することが典型的になっていったという可能性が高いことをこの結果は示しているといえるだろう。

3.2.5. 特定の連鎖パターン

この節では NP (,) as we know it という特定の連鎖パターンが時代を経るにつれて顕著な優位性を示すことを見ていく。2.2 節から現代英語における NP as we know it という連鎖パターンはそれだけで全体の 75% という際立った使用率を示すことが判明しているが、COHA での調査の結果、常にそのような優位性がみられるわけではないことが判明した。その結果を図 7 に示す。

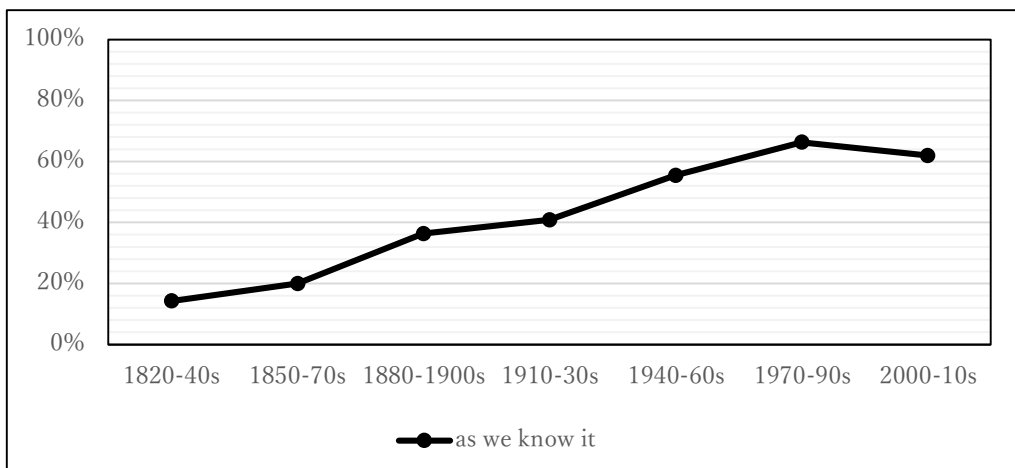


図 7 連鎖 as we know it の割合

この図が示すように、19 世紀後期にかけてまでは 20% 前後であり、それほど大きな割合を占めていなかったが、19 世紀末から 20 世紀初期にかけてその割合を倍増させ、さらに 20 世紀後半には 65% を超えるような割合にまでその領域を広げ、時代を通して右肩上がりに上昇してきたことが分かる。これは 3.2.2 節で観察した as 節主語の we の増大が大きな役割を果たしていると考えられる。動詞 know 自体には大きな変化がなく現在形がどの時代区分においても典型的に使用される (cf. 3.2.3 節) ために、as 節主語 we が NP as we know it 表現類で優位性を獲得していく中で無標の現在形 know とともに単数の概念を表すような実体と主要な連鎖パターンを形成していったと考えられる。言い換えれば、単なる個人の認識や理解に基づくのではなく、現在において多くの人々が知っているようなものをテキスト内に導入することに特化する形で NP as we know it 表現類は発達したのだと

考えられる。

3.2.6. 主要部名詞のタイプ

この節では NP as we know it 表現類の NP の位置に生起する名詞は時代を通じて特定の種類や共通した特徴が観察されるのかどうかを明らかにする。COHA から得られたデータをまとめたものが、表 5 である。

表 5 NP as we know it 表現類における NP の種類

年代	被修飾名詞の種類 (生起数)
1820-1840s	past (2), art, establishment, man, nature
1850-1870s	man (2), nature (2), woman (2), Charles, day, faith, house, John, Jew, life, organization, property, reporter, story, soul, truth, word
1880-1900s	life (14), man (6), nature (4), truth (4), Boston (2), civilization (2), consciousness (2), form (2), government (2), love (2) world (2)
1910-1930s	life (11), world (7), civilization (6), man (6), matter (5), truth (4), business (3), art (2), corporation (2), earth (2), fact (2), love (2), space (2), state (2), theater (2), universe (2), Woodrow (2),
1940-1960s	life (13), world (10), civilization (6), fact (6), truth (5), democracy (4), America (3), book (3), society (3), broadcasting (2), cycle (2), event (2), government (2), love (2), man (2), nature (2), order (2), planet (2), science (2),
1970-1990s	life (32), world (26), civilization (16), science (4), art (3), law (3), man (3), reality (3), welfare (3), baseball (2), bread (2), death (2), earth (2), music (2), system (2), time (2), truth (2), universe (2),
2000-2010s	life (52), world (32), civilization (8), welfare (5), reality (4), fact (3), internet (3), truth (3), war (3), business (2), computer (2), democracy (2), earth (2), humanity (2), industry (2), lobbying (2), man (2), medicare (2), model (2), race (2), television (2)

この表では生起数が少ない 1850-70 年代区間までは生起した名詞を全て書き記し、それ以降の年代では 2 回以上生起したもののみを提示している。生起した回数は名詞の隣に括弧の中の数字で示してある。単複は同じ名詞としてカウントしている。

まずどの年代にも当てはまる特徴であるが、art, civilization, death, past, life, love, man (「人間」の意), nature, space, society, time など非常に抽象的または形而上的な概念を表すものが多く存在することに注意したい。その時々年代に生起する種類は変化するものの、触知可能ではない概念が典型的に NP as we know it 表現類の NP スロットを占めているのはこの表から明らかであろう。America, universe, world のような空間上にある一定の領域を有すると考えられているものであっても、(22) の例が示唆しているように、NP as we know it 表現類全体として考えた場合は実体そのものというより、その実体の概念・性質的側面が前景化されている (cf. Sato 2023, Huddleston and Pullum 2003)。

(22) The end of the world, at least the world as he knew it, had come.

(COHA, FIC, 1998)

この例では the end of the world の the world は実体としての現実存在する世界を表していると考えられるが、対比的な形で導入されている the world as he knew it はある男性が頭の中で認識している世界であって、それと現実で対応する実体は厳密には存在しないといえるだろう。したがって、これらのことから NP as we know it 表現類というものは通時的に見て、実体というよりその概念的側面に焦点をあてるために、現代まで一貫して抽象概念を典型的に NP 位置に導入する傾向があるといえるだろう。

続いて通時的な変化に関する傾向について述べる。括弧内の生起数の増加に注目すると life, world, civilization は 20 世紀初頭あたりからどの年代においても最も生起数が多い名詞のタイプとなっている。時代の変化とともにこれらの名詞が好まれる要因の一つは 2.2 節で述べたように「人が営む上での必須要素であること」が考えられるが、表 4 からさらに導き出すことができる要因はこれらが表す量や規模の大きさである。life という語は「人生」という意味の他にも「生命体」という意味でも用いられ、この時生命体というのは人だけでなく様々な種類の有機体からなる生物のことを包括する用語である。world はあらゆる地球上の国や地域を包括する概念であるし、civilization は政治・経済・言語・文化・技術など多岐にわたる人類社会の営みの総体としての語である。したがって NP as we know it 表現類は単に抽象的な概念を表現するために用いられるのではなく、人間の生活・生命に密接に関係し、その規模や量が突出し、上位概念として認識可能な名詞との親和性が通時的な変化の過程において高まっているとみなすことができるであろう。

3.2.7. 関連する状況タイプ

現代英語の NP as we know it 表現類は 2.2 節で概観したように、起源、変容、そして特に非存在タイプと際立った共起関係にある。この節ではこの傾向は初期の頃から維持されているものであるのか、また変化があればどのような過程を伴っているのかに着目して COHA での通時的データを基に観察していく。表 4 の調査結果を視覚化に理解しやすい形で以下の図 8 にまとめている。

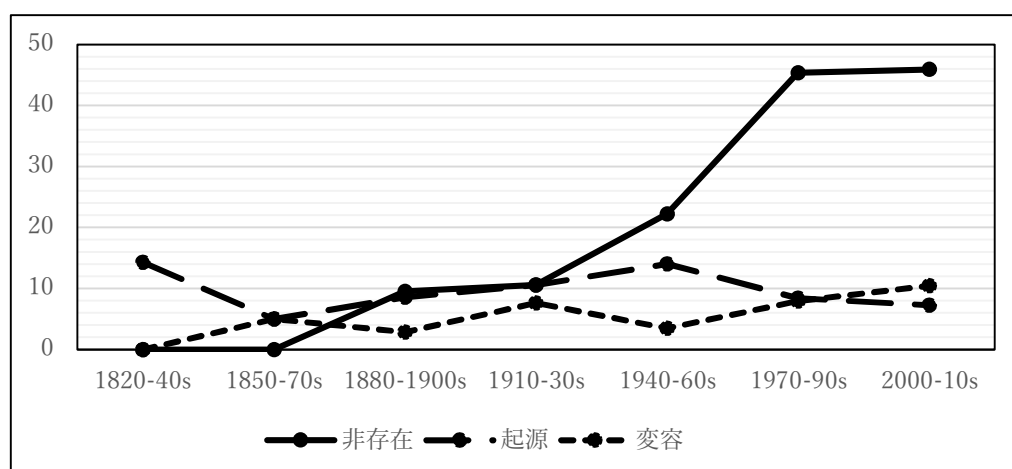


図 8 3つの状況タイプの個々の推移

興味深いことに、現代では顕著な割合を占める (23a) のような非存在タイプは 19 世紀後半までは確認されていなかった。その後 20 世紀へと移り変わる中でその姿を現すが、20 世紀半ばまで (23b) の起源タイプや (23c) の変容タイプとさほど変わらない割合で 10%前後の割合しか占めていなかったことが判明した。

- (23) a. [...] the world as we know it to-day is crumbling to bits.

(COHA, MAG, 1916)

- b. The advent of modified uniformitarian principles [...] marked the birth of Geology as we know it now.

(COHA, NF/ACAD, 1884)

- c. At night the bush clover leaves turn upward, completely changing the aspect of these plants as we know them by day. (COHA, NF/ACAD, 1901)

その後 20 世紀中頃にかけて非存在タイプは倍増し、20 世紀後半においてさらに倍増する形で急激にその地位を確立していったことがこの図から読み取れる。

ここで、なぜ非存在タイプが現れ、そして NP as we know it 表現類と非常に親和性があるのかについて考えてみると、表 4 に記したもう一つの状況タイプである不一致タイプが表す意味が関係している可能性がある。このタイプは表 4 から分かる通り、19 世紀半ばから継続して生起する状況タイプである。この不一致タイプとは「ある実体と別の実体を比べてこれら二つが相容れないものであると書き手が判断する」タイプのことを指す (cf. Sato 2023: 80)。(24) が典型的な例であり、(24a, b) のように名詞のタイプ自体が違ってそれらに整合性がないことを示している場合や (24c) のようにタイプは同じだが詳細は異なる場合などがある。

- (24) a. The contrast between his words and the truth, as I knew it, concerning her, started out [...]. (COHA, MAG, 1868)
- b. This wrath is not jealousy as we know it. (COHA, NF/ACAD, 1899)
- c. These consciousnesses must indeed be of forms very different from human consciousness as we know it; [...]. (COHA, MAG, 1905)

このように二つの間に整合性がないことを明示的に文中に表現している場合は不一致タイプであると判断できるが、次のような例は、「私たちの知る生命体」は火星では生きられないだろうが、「私たちの知らない生命体」ならばその可能性があるかもしれない（または排除していない）ことを暗黙的に life as we know it を使うことで伝えていると考えることができる。

- (25) [...] the atmosphere of Mars is less than 1% as rich in oxygen as Earth's air-insufficient to sustain "life as we know it." (= (18))

したがって、明示的に比較対象が表れていない場合でも当該表現類を用いることで暗に別の違う実体を想起させる機能があると仮定すれば、今の姿かたちの実体が消えてなくなる/もうすでにないという典型的な非存在タイプの状況は過去や未来においてその実体に違いが生じるためそれらを比べると相容れないもの同士であると考えることができ、その結果両者に共通点を見出すことができる¹⁸。したがって、不一致タイプの意味内容が同一指示物に適応された場合の一つの表れ

¹⁸ 非存在タイプを違いが生じるという変化の観点で捉えれば、「起源」タイプも存在していないものが存在するようになるという変化、「変容」タイプもある実体やその側面が変化するという点で共通性を持つ。

が非存在タイプであると考えることができる。

次に 20 世紀中期を含むそれ以降の急激な非存在タイプの増加について考えていく。一つの大きな要因として、20 世紀後半の動乱の情勢や技術的革新・制度改革などの社会的要因が絡んでいる可能性が高い。特にこの時期には第二次世界大戦や冷戦などの戦争が生じ、国に甚大な被害や混乱を招き大きな変化をもたらされた時期である。このような情勢を反映した形で (26) のように戦争やそこで使われる核兵器が原因となって国や世界の破滅を引き起こすというような内容で文芸・映像作品が作成され、その中で NP as we know it 表現類が使用されていることがここから分かる。

- (26) a. [...] it [the war] would mean the end of America, as we know it, if we were drawn in. (COHA, FIC, 1944)
- b. Total destruction by nuclear weapons. And from this hour forward, the world as we know it no longer exists. (COHA, TV/MOV, 1955)

さらに技術的革新や制度改革などによって変革をもたらす状況を如実に描写しているのが以下の (27) の例である。

- (27) a. Nevertheless, that the coal industry as we know it today is obsolescent is clear beyond question. [...] And the same forces which have brought about the wholesale replacement of anthracite coal with fuel oil [...]. (COHA, NEWS, 1946)
- b. Broadcasting, as we know it today, may be technically out-moded within the next few years. (COHA, MAG, 1942)
- c. [...] passage of the wage-hour bill would mean “the end of civilization as we know it.” (COHA, MAG, 1938)

(27a) では石炭産業が衰退し別の燃料源 (e.g., 燃料油、核エネルギー) に取って変わる状況を、(27b) では技術的發展によってラジオ放送が時代遅れで衰退する可能性を、(27c) では法案制定によって文明が終わるほどの衝撃をもたらす状況を表している。このような激動な時代を描写する上で先ほど述べた NP as we know it 表現類が持つ含意はまさにうってつけの表現であり、それゆえ、非存在タイプがこのような劇的な拡大を経たのだといえるだろう。また形式面においても

(27c) や (19)¹⁹ のように消滅を表す end までをも含む形で引用符が使われていることは NP as we know it 表現類と非存在タイプの結びつきが相当に密接で特定の状況タイプまで含んだセットフレーズも同様に記憶に定着している可能性を示唆する。

最後に述べておくべき点は図 8 から分かるように、非存在タイプの割合が増加しても起源や変容タイプに大きなマイナスな影響は与えていないということである。むしろ被害を被っているのはそれ以外の「その他」カテゴリーである。これを図示したのが図 9 である。

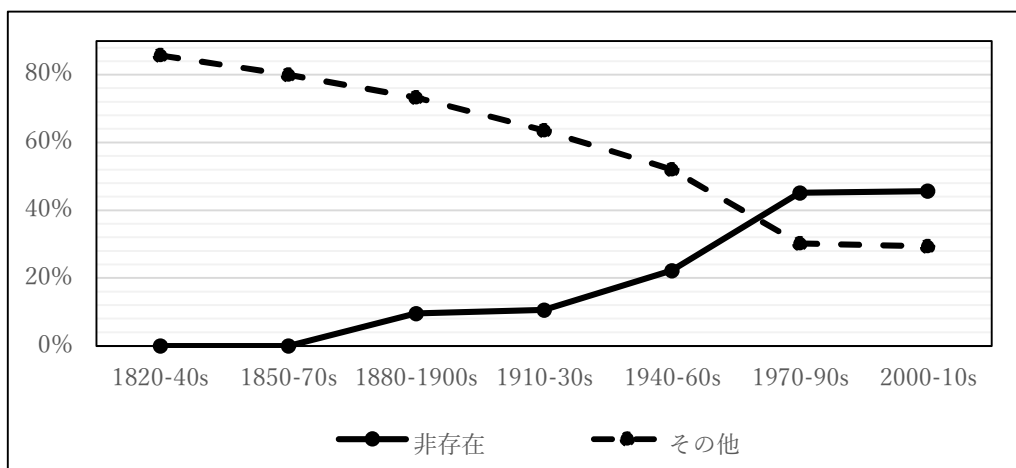


図 9 非存在タイプとその他カテゴリーの推移

非存在タイプの割合が増加していくにつれて今まで優勢であった「その他」カテゴリーが大きく変動し減少しているのがこの図から見て取れる。40%ラインの横軸を境に上下を反転させると鏡像関係のような形を構成している。すなわち非存在タイプが際立つことによって、当該タイプと関係が希薄な「その他」のカテゴリーは NP as we know it 表現類との親和性が薄れ、徐々に衰退していつているのだとみなすことができる。

¹⁹ (19) にある end welfare as we know it というフレーズは、1992 年の選挙運動キャンペーンにおいて当時大統領候補であった Bill Clinton が語った言葉としてその後しばしば引用されている。

4. まとめと今後の展望

本稿では現代英語に存在する NP as we know it 表現類の特徴変化について史的アメリカ英語コーパス COHA を用いて調査し、その結果と観察を提示した。具体的には NP as we know it 表現類は時代とともに右肩上がりに増加する傾向がみられ、as 節主語は代名詞 we へとその割合を増加させていき、同様に as 節動詞 know もまた現在形へとその分布を微増させていった。また as 節と先行名詞の間にあるコンマの有無に関してはコンマ有からコンマ無へとその割合を大幅に増加させていった。このような変化を遂げる中で NP as we know it 表現類は特に as we know it という連鎖パターンが優勢な形式になった。これは個人的な認識や過去の認識ではなく、多くの人々が現在知っている形での対象物を文章や話の中に導入するために当該表現類が典型的に使われていくようになったことを示している。そしてこの対象物にも特徴があり、初めは抽象概念一般と結びついていたが次第に、人の生活基盤に深いかかわりを持ち、種々の要素を包含する概念との結びつきが顕著になっていることが判明した。さらに NP as we know it 表現類と関連する状況タイプに関しては、現在の特徴的な非存在タイプの有意性は長期的に確立された特徴ではなく 20 世紀になってからその兆候が観察され始めたことが判明した。

本調査によって個々の特徴の変遷は概ね明らかになったものの、各要素間の関係性についてはさらなる精査が必要であろう。加えて、as we know it 表現類の成立過程そのものに関しては究明の余地を残している。COHA の収録年代を遡るアメリカ英語の史的コーパスの入手・構築には制約が伴うため、イギリス英語の史的コーパスを用いて、当該表現の起源を解明することが求められる。

参考文献

- Brinton, Laurel J. 2008. *The comment clause in English: Syntactic origins and pragmatic development*. Cambridge: Cambridge University Press.
- González-Álvarez, María Dolores. 1996. Epistemic disjuncts in Early Modern English. *International Journal of Corpus Linguistics* 1:219–256.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 2003. *Grammaticalization*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kumagai, Yoshiharu. 1989. A Note on English *As*-clause. In Yukio Otsu (ed.), *MITA Working Papers in Psycholinguistics, Volume 2*, 55–63. Tokyo: MITA Psycholinguistics Circle, Keio University.

- Kumagai, Yoshiharu. 1991. The Principle of Compositionality and Adnominal *As*-clause. *LEO* 20: 89–109.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundation of cognitive grammar, Vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of English Language*. London: Longman.
- Rouchota, Villy. 1998. Procedural meaning and parenthetical discourse markers. In Andreas H. Jucker and Yael Ziv (eds.), *Discourse Markers: Descriptions and Theory*, 97–126. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Sato, Yoshiaki. (2023). On the *NP as we know it* Expressions and its Variants. *English Corpus Studies* 30: 7194.
- Traugott, Elizabeth Closs and Graeme Trousdale. 2013. *Constructionalization and Constructional Changes*. Oxford: Oxford University Press.
- 小川明. 1985. 「As の機能に関する試論—as は万能代用形ではないか (その 2)」『名古屋工業大学学報』37: 53–62.
- 八木克正. 1996. 『ネイティブの直感に迫る語法研究：現代英語への記述的アプローチ』東京：研究社.

コーパス・辞書

- Allen, Robert. 2006. *Allen's Dictionary of English Phrases*. London: Penguin Books Ltd.
- Davies, Mark. 2008-. The Corpus of Contemporary American English (COCA). Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- Davies, Mark 2010. The Corpus of Historical American English (COHA). Available online at <https://www.english-corpora.org/coha/>.
- Oxford University Press. Oxford English Dictionary Online. Available from <http://www.oed.com/>
- 安藤貞雄・福村虎次郎・河上道生・小西友七・三浦新市・空西哲郎・渡辺登士 (編著) 1977. 『続・英語語法大辞典』東京：大修館.
- 安藤貞雄・福村虎次郎・河上道生・小西友七・三浦新市・村田勇三郎・渡辺登士 (編著) 1981. 『英語語法大辞典・第3集』東京：大修館.
- 石橋幸太郎・広瀬泰三・伊藤健三・高梨健吉・鳥居次好・渡辺藤一 (編著) 1966. 『英語語法大辞典』東京：大修館.
- 渡辺登士・福村虎次郎・河上道生・小西友七・村田勇三郎 (編著) 1995. 『英語語法大辞典・第4集』東京：大修館.

Changes in Characteristics of *NP as we know it* Expressions: With Focus on American English

Yoshiaki Sato

This paper investigates the development of various characteristics observed in what we call “NP as we know it” expressions, using Corpus of Historical American English (COHA). The findings revealed that within *as*-clauses, there was an increasing preference for the pronoun “we” as the subject, while the present tense form of the verb “know” showed a slight increase in frequency during the period from the 1820s to the 2010s. As for the presence of a comma between the NP and the *as*-clause, the zero-comma variants dramatically increased, reflecting the transition of the *as*-clause from a supplementary/commentary element to an integral component of the NP. In these changes, the particular string pattern “as we know it” became prevalent. This shift means that the “NP as we know it” expressions began to be used in texts or discourse typically to introduce entities widely recognized in common knowledge, rather than those known to a specific person or limited group. Furthermore, the entities referred to by these expressions also followed an intriguing path of development: while they were initially associated with abstract notions in general (e.g., nature, space), they came to be linked with umbrella concepts (e.g., “life,” “world,” “civilization”) that are deeply embedded in human living conditions and subsume various subordinate elements. Finally, but not least, the non-nonexistence type, which represents the most dominant situation co-occurring with the “NP as we know it” expressions in modern English, was not prevalent before 19th century, with its sign beginning to appear around the 20th century.